

隱語辭典

榎垣実編

隱語辭典

榎垣実編

東京堂出版

編者略歴

明治三四年二月に生まれる。

大正一二年同志社大学文学部卒。

同志社大学教授、和歌山大学教授、関

西外国語大学教授、帝塚山学院短大教

授を歴任。昭和五十一年二月死去。

著書「日本外来語の研究」京言葉」

「京阪方言比較考」船場言葉「俗語の語原」等。



隠語辞典

定価三八〇〇円

昭和三十一年八月二〇日 初版発行
昭和五八年一月一〇日 三一版発行

編者 榎垣実

発行者 岩出貞夫

印刷所 文殊印刷有限公司

製本所 渡辺製本株式会社

発行者 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七(〒100)
電話 東京三三三二七四一 振替東京三二七

序 文

このほど、同学の榎垣実教授が多年にわたつて編集積義に努力された所の、本邦の隠語辞典が、わが国語学界および教育界その他の実業界をはじめ、趣味界に対しても、寄与されるに至つたのは、公私どちらから申しても喜ばしいことである。

そもそも隠語の趣味の深遠なることは今さら多説を要しないが、先進の支那における古今の事實はさておき、本邦においても、かなり古くさかのぼること、すでに百有余年前に博覧の山崎好問堂などが概説したごとくで、明治以降に至つても、殊に盗賊用語の如きは、警察眼をもつてあちこちに多少の語彙が編刊されたこと周知の通りである。商工人らの符徴や、花柳界の通語や、僧侶間の秘語等、それぞれ方言卑語と相錯綜し出入し、洞房秘語とも交渉し、その由来久しく多端多岐、かつ又万葉の戯書や隠字などにも境を接し、ナゾ類とも関連してくる。後奈良院の何曾のごときとも、醒睡笑以下の軽口話ともつながつて、興味はますますふえてくる。すべてこれらの古今の文献を涉獵して、国語史学的な研究をほどこしてゆくことは、必ず

しも閑余の小事業ではなかつたと信ずる。又その淵源をさかのぼつてゆくと、むろん漢土にまで及ぶこと当然であるが、万葉に出てくる戲書の山上復有山の五字が拙名たる出の字のかくし字であつたり、下つては微苦笑を禁ぜざらしむる呂の字がまた同様である事柄、共に漢土に出典をもつのも面白い。すべてこれらのカテゴリイが相推移し、相関連する具合を究めることが、煤垣君によりて啓開されて来たのは愉快である。

わが国すでに諺語や方言や民俗語や外来語などの特殊辞典が存し、また幾多の特殊事典類の続出する際に、いまこの煤垣氏の隠語辞典が、柳田東条両兄の民俗方言の両辞典の名著を出した東京堂より新刊されるに至つたことは祝福されねばならぬ。

昭和三十一年七月七日

新 村 出

はじめに

日本語という大きな言語体系を造り上げている要素は、いろいろあるけれども、それを大きく分けると、「一般語」と「特殊語」との二種になるだろう。その一般語の方は、「共通語」とか、時には「標準語」とさえ呼ばれていて、明治以来学校で教えられ、新聞・雑誌・書物などの文章に用いられて、国民一般によく知られ、詳しく研究されてきた。たいていの人は、これだけが日本語だと考えているだろう。

ところが国民の大部分が日常生活で使っている言語は、土地によってずいぶん違っている。それが方言と呼ばれるもので、もしこの方言が日本語でないことになると、日本語の使えない日本人が、全国いたる所にいることになる。そんな妙な話はないので、方言も立派な日本語である。ただそれが全国共通でないだけであるから、地域的に違っている特殊語だと考えるべきである。

しかし、また一方には、職業とか身分とか階層とかいうような区別にしたがって、社会的集団が生れたり、集団が生れないにしても組織化されたりして、その集団や組織だけに通用する

言葉、いわば社会的に違っている特殊語というものも、ずいぶん多いのである。或る学者はこれらを「社会方言」と呼んでいるが、また英語を借りて「スラング」と呼ぶ人も近年特に多くなった。その「スラング」を日本語に訳すと、結局「隠語」ということになる。盗人・すり・詐欺師・やくざなど反社会的集団の仲間が使う言葉だけを「隠語」と呼ぶ人もあるが、私はもっと広く「スラング」の訳語として「隠語」を使う方が便利だと考えている。

要するに、日本語言語体系を造り上げている一般語と特殊語のうちで、一般語の研究は非常に進んでいるのに、特殊語の研究はずいぶん立ちおくれていた。『全国方言辞典』や『分類方言辞典』が出版されたのも、つい近年のことであった。だが、方言の研究は、その姉妹語ともいべき隠語の研究に比べると、かなり盛んであり、その成果も見るべきものがあつたのに、ひとり隠語の研究だけは、ほとんど手がつけられずに今日に及んでいる。これは隠語というものの性質から避けられぬ宿命だったかも知れないが、日本語というものを研究する上から見れば、たしかに大きな片手落ちだったといわなければなるまい。

「君子が取り上げるのをいさぎよしとしない」と考えられて来た隠語の研究を、敢て取り上げたのは、私の青年時代からの研究が、特殊語の究明という方向に進んできて、しかも、特殊語が究明されてこそ、日本語が全体として正しく研究されることとなると信じるようになったからに他ならない。一般語の中の特殊要素である外来語の研究から出発した時、私は外来語が隠語として使われることに興味をひかれた。私の隠語研究はその時に始まったといえよう。私

の研究が特殊語の領域に進んで、方言の研究に没頭していた間にも、その中に職業語とでも呼ぶべき要素が多分に含まれていることを知って、民俗語彙と隠語とが、方言と併行して研究されねばならないことを痛感し、資料だけは根気よく集めていた。その頃私の勤めていた同志社大学の学生村田弘君が、隠語研究に志していて、同君の力を借りることが多かった。そしてこの辞典の編纂に当たっても大いに役立ったのである。

たまたま、昭和二十五年に、私が和歌山大学にいた頃、柳田国男先生から、米国の学者が来て、日本にはなぜ隠語辞典がないのかとたずねられた。作ってみる気はないか。というような意味のお便りをいただいた。私がこの辞典を計画しはじめたのは、まさにこの柳田先生のお言葉が動機となったのである。それ以来、本気で資料を集め、すでに出版された隠語集の類はほとんど全部眼を通したし、直接採集にも、時間の許すかぎり努めてきた。そして昭和三十年の夏は、高野山にもって原稿の作成に専念し、昭和三十一年五月半ばに、一万七千語に近い集大成を完成したのであった。

日本の隠語の研究が、主として西日本を舞台として進められて来たことも、考えてみれば奇しき縁である。明治中期の『日本隠語集』は広島で、大正初期の『隠語輯覧』は京都で、昭和初年の『隠語の構成様式并其語集』は大阪で、それぞれ出版されていて、それらが日本の隠語研究の主流となっている。その後塵を拝して、大阪で今この文を草している私には、多少の感懐がないわけではない。そしてまた、柳田国男先生の『民俗学辞典』と東条操先生の『全国方

『分類方言辞典』の姉妹篇として、同じ東京堂から、この辞典が出版されることについて、自分の無力非才を棚に上げて、無量の感慨を禁じ得ないのである。それについても私の最も幸福とするのは、本辞典に集めた資料のほとんど凡てを登載することができた点である。そして、ひそかに集め足りなかったのではないかと怖れるのである。

辞書の編纂ということは、絶大な努力を必要とする。あまり頑健といえない私がこれだけの仕事をやりとげるのは並大抵ではなかった。それだけに、出来上ったものも、もちろん完全だとは自分でも思っていない。しかしこの種の辞典として、科学的な方法で編纂された最初のものであることを思えば、一人の力で成し得る最大限に近いとは、信じている。私はこの辞典が、二十年、五十年の後に、自分では出来ないとしても、誰かによって増補され、改訂されて、一層完全なものになるならば、それで満足である。私はただその土台を据えただけである。もしこの辞書が、日本語の研究に何かの寄与をなし得るならば、私の目的は達せられるのである。隠語の詳しいことも、本辞典の目的としたところも、附録の「隠語概説」に述べておいたので、ここでは繰り返さない。この辞典を利用される方々は、まず「隠語概説」や「この辞典の使い方」を読んでいただきたい。そうすれば利用価値は大いに高まるだろうと思う。ただひとつ、「何を好んでこんな物好きな辞書を造ったのか」と怪しまれる方々もあるかと思うので、一言だけ述べておきたい。言葉というものは人間が社会生活を営むために、なくてはならないものであり、自分の考えや感情を相手に伝えるための手段なのである。だから言葉は、必ずそ

の背後に人間社会を持っている。言葉は人間の社会生活の反映にすぎないのである。言葉はその社会生活の必要から生れるもので、社会生活を考えないで言葉だけを切り離して考えることはできない筈である。「臭いものには蓋をして」上品な面だけを眺めて安心し、喜んでゐることは、人々の勝手ではあるが、科学的精神を尊ぶ者は、あくまでも社会の実態を確実に見究めたいと願うのである。われらの愛する日本語、その日本語を生んだ社会、その社会に営まれている生活、それを見究め見尽してこそ、本当の日本語が分り、日本社会が分り、日本人の生活が分るのではあるまいか。私にはそんな大仕事はとも出来る見込みがないから、差し当り、自分の専攻する言葉についてだけでも、今まで不当に閑却されていた日本語の「陽の当らぬ場所」に「陽を当てる」試みをしたのである。この辞書に載っている言葉の中には、日本語でないものは一語もない。好むと好まないとに拘らず、これは動かしがたい事実なのだ。私はこの毅然たる事実だけを示して、その判断や処置はあなたがたに任せたいと思うのである。これらの言葉に対して、眉をひそめる前に、どうしてこんな言葉が生れたのか。何がこんな言葉が生れる必要を生んだのであろうか。そこまで、われらはよくよく考えてみる必要があるのではないか、と私は思うのである。

最後に、本辞典が完成するまでには、多くの有縁無縁の方々の恩恵に浴した。それなくしては本辞典はとも出来上らなかつたであろう。そしてもし許されるならば、私をして仕事に専念せしめた私の家族にも、感謝の念を表しておきたい。本来ならば恩恵に預つた方々の氏名を

挙げて謝意を表すべきであろうが、あまりに多いので、省略する非礼をお許し願いたい。

私の言語研究に、終始変らぬ御鞭撻と御指導とを賜ってきた新村出先生は、本辞典の世に出ることを殊の外お喜び下さって、この拙い辞典のために、わざわざ序文を賜った。身に余る光榮に私は感謝の言葉を知らない。ただ、柳田国男先生からも、序文をいただく筈であったが、その光榮に浴すことのできなかつたことはまことに心残りであった。

出版に当っては、東京堂専務大橋勇夫氏の特別の御配慮と、出版部の増山新一部長、浅井隆氏等の御尽力に負う所が多い。記して厚い感謝の念を捧げる。

昭和三十一年七月

榎垣実

この辞典の使い方

この辞典には、語の見出し方・語釈の読み方・文字や符号の使い方に一定のきまりがあります。十分に利用されるためには、はじめにこれをよく読んで下さい。

見出し語

すべて発音通りの仮名づかいで、日本語・漢語は太字のひらがな、外来語は太字のカタカナで記した。外来語でも、古くから使われている語（たとえば梵語から入った語）などには、ひらがなで記したものもある。

表記法 完全な発音式を採用した。耳なれない語も多
いから、発音式にしないと誤りが起る心配があったからである。「現代かなづかい」とは少し違う点があるから注意していただきたい。特に「現代かなづかい」で区別のある「おおおかせ」「おおちゅう」「王朝」はすべて同音の繰返しに統一して「おおおかせ」「おおちゅう」と記した。外来語の場合にも長音符号は使わなかった。特別な表記法や長音符号を使うと配列の順序が問題になつて引きにくいからである。濁音は清音の次に、半濁音は

濁音の次に配列した。（たとえば「はん」「ばん」「パン」の順となる。）

見出し語の番号 発音が同じであつて、意味や用法のちがう語の場合に、見出し語の下に（たとえば「あい₁」「あい₂」「あい₃」「あい₄」のように番号を付けた。これは他の項目から参照する場合に、参照すべき語がどれであるかを、分りやすくするためである。同音語の配列順序は便宜的なもので、たいした意味はない。

見出し語の中の区切り 見出し語が単語でなくて、句とか文とかである場合に、単語と単語との間に区切り（・）を入れて、語の切れ目を示した。（たとえば「あいずち・お・うつ」「相槌を打つ」のように。）これは、ひらがなばかりを続けて書くと読みにくいからである。しかし一般にひと続きに発音され、単語と意識されている場合（たとえば「たけのこ」「竹の子↓筍」）には、区切りは入れなかった。

文字表記

「見出し語」のすぐ下に、その語を漢字や外国字で書く場合の文字表記を「」の中に入れて示した。日本語は漢字かなまじりで、漢語は漢字で、外来語は原語の外国字で記した。これは、かな文字だけでは意味が分りにくいので、それを補うためと、また普通に使われている表記法（慣用表記・当て字など）を示すためである。日本語を漢字かなまじりで表記する

時には、なるべく多く送りがなを使って読みやすくした。また必要と認めた時には歴史のかなづかいをも使った。普通に使われている表記が二種以上ある場合には（たとえば「逢引き・躰曳」のように）なるべく多く示した。

当てるべき字が見当たらない場合、どの字を当ててよいかわからない場合は、記さなかったが、多少怪しいものでも「？」を付けて示しておいた。また一般に使われている表記でも、それが適当と思われる場合には、やはり「？」を付けて示しておいた。

隠語には、普通語を略したり、逆にしたりして造った語が多いが、その場合にもできるだけ漢字表記を示した。逆語の場合の漢字表記（たとえば「ぶんしん」「聞新」↑「新聞」などは無意味のように思えるが、この逆語は漢字表記を基準として生れたと思われるから（かな文字基準ならば「んぶんし」となるべき筈）、漢字の転置を示した方が理解の上で便利だと考えて、示すこととした。

外国字表記 外来語には原則としてその原語を示した。英語から取り入れられた語には、その原語の所属語名を示すことを省略したが、その他の場合にはできるだけ示すこととした。ロシア語・ヘブライ語などから取り入れられた語の原語は、ロシア文字・ヘブライ文字を使わず、ローマ字書きにして示した。原語の意義を示す必要のある場合には、「語原解説」の中にそれを示した。

原語の所属国語名は、㊤ーポルトガル語。㊦ースペイン語。㊧ーオランダ語。㊨ードイツ語。㊩ーフランス語。㊪ーロシア語、のように略語で示した。特殊な国語名の場合には略語を使わなかった。

品詞

「文字表記」の次に、その語の品詞を示した。名詞だけはあまり数が多いので示すことを省略したが、他の品詞は、**㊫**動形動副**㊬**動助動接頭接尾のような略語で示した。句や文の場合は**㊭**と示し、またその句の文法的な働きによって、**㊮**句、**㊯**句と区別を立てた。本辞典で特に使った略語を次に説明しておく。

㊫造語要素。これは主として名詞・形容詞（語幹形）であるが、単独でも、それを他の語と組み合わせる新しい語を造るのに使うことの方が多いもので、たとえば、「あか」銅・赤「**㊬**」は「赤馬」（銅貨）。「赤シャベ」（銅シャベル）。「赤晋太」「赤面」「赤生」（銅貨）。「赤師」（銅・金属類専門の盗人）などの語を造る要素として使われ、隠語としては単独の用法より重要と思われるので、特に造語要素という名で示した。これをよく知っていると、新しい隠語に接しても容易に意義を解くことができる。その重要性から**㊬**と**㊭**という類を設けたので、**㊮**と違ふ点は、それらが単独でも使える点にある。こういう造語要素から造られた語の項目には、なるべくその語素への参照を付けておいたから、

是非とも合せて見ていただきたい。

④一連語。たとえば「垢も身の内」のように、文法的には文の働きを持つものを示す。

⑤句一名称詞句。⑥句一形容詞句。⑦句一動詞句。たとえば「青竹の手摺り」(前科者の凶悪犯人)「沖が悪い」(危い)「赤犬を這わせる」(放火する)などの、文法的には一単語と等しい働きをする連語を示す。しかし厳密に判定しにくい場合もあったこともちろんである。だいたい目安を示したに過ぎない。

隠語の中には、語形と用法とが食い違っている場合もあり(たとえば「いさましい」は語形は形容詞だが、意義は「不良少女」で用法は名詞である)、また文献資料から得た語には用法の詳しく分らぬ語もあり、品詞を示すのに困難を感じた場合もあった。

参照見出し語

項目に示した語と密接な関係があったて、当然合わせて見る必要があると思われる語は、「文字表記」の次に「↓」をつけて、太字で示した。この参照語を参照すれば、省略の過程・語原・説明などの細かな点がよく分るようになっていく。隠語ではいろいろの語が複雑に関係し合っていて、その関係を知らないと、意義や用法も十分に分らず、興味もわいてこない。参照はなるべく多く示したから、面倒がらず活用して、この辞典の利用価値を高めていただきたい。

語釈

「品詞」の次に語釈を示した。当用漢字だけを使って示すことが困難だったので、かな書きと両方をならべて示した場合もある。また漢字だけでは読み方が分らないため(「金」はキンかカネか分らない)、かな書きを示したこともある。

語釈の分類 語義がいろいろと発展したり、転化したリして、しかもそれが一つの語義の系統に属することが明らかである場合は、一つの項目を幾つかの類に分けて、①②③④などと数字で順序を示した。その配列はなるべく、一般的な意義から特殊な意義へ、根本意義から派生意義への順に従った。たとえば「あか」「赤」は「①赤色。②火・火事。③血。④銅。⑤好色」のように分類配列した。また②の二つの意義を区別する必要がある場合は、「(a)火。(b)火事。」と分けたこともある。この配列の順序は必ずしも意義の発展・分化の順を示さない。「赤色」からは「火」「血」「銅」「好色」のそれぞれに発展し得るけれども、「火」から「血」「銅」に発展することはない。語釈の区分は最少限にとどめた。

参考事項

「語釈」だけではあまりに抽象的・一般的である場合の補足的説明や、「語釈」と直接関係はないが、それを知っていると具体的内容が一層よく分るような事は、「語釈」の次に(時として「語原」の次に) () の中に示した。

語原

「語釈」の次に、語原についての説明や、その語の成立についての註釈などを、「↓」の中に示した。隠語では語の成立の由来の複雑なものがあり、それを知らないとは理解できない語も多いので、本辞典では語原の説明に特に力を入れた。ただし、どうしても分らないのが多かった。疑問と思われるものには「？」をつけて示した。

略語・訛語・逆語などは、「参照見出し語」として示した場合もあり、「参照語」として示した場合もある。

用例

「語原」の次に、用例を「↓」中に示した。なるべく多く示した方がよいとは思ったが、これも最少限にとどめなければならなかった。用例について出所を示す場合は、用例の下の（ ）中に示した。

出典

項目に出した語の出典は、「用例」の次の『』中に示した。これは必しも最も古い用例が出てくる書名とは限らない。たとえば「あららぎ」の項に「皇大神宮儀式帖・『延喜式』とあるのは、前者に「塔乎阿良々支云。」とあり、後者に「塔称阿良良岐。」とあるのを示したものである。出典を示したのは特殊な語の場合に限られている。江戸時代までの用語については、なるべく出典を示したいと考えて、大いに努力はしたのであるが、手が廻りかねて思うようにはいかなかった。

参照語

「出典」の次に、参照語を「↓」を付けて示した。参照語は主として、系統の違う語で意義の等しい語（同義語）・反対の意義の語（反意語）・同一形式で構成された語・一対をなす語（対語）・特に密接な関係を持つ語など、要するにそれらの語を知っていると、その項目に出ている語が一層よく理解できるような語である。この参照語を根気よく見れば、隠語の知識は豊富になるばかりでなく体系的になる。

類別

「参照語」の次の（ ）中に示したのは、その隠語がどういう社会階層・社会集団で使われているかという、隠語の類別である。原則として二字で示したから、たいてい分ると思うが、分らない場合は「略語表」を見られたい。

必要のある場合だけ、類別の上に府県名・国名を示した。たとえば「(福井)盗」とあるのは、「福井県で強盗・窃盗などが使う」という意味である。

年代

最後に㊦などの略語で示したのは、その語の使われた年代である。隠語では、普通語と比べて、語の移り変りがはげしいから、その使われた年代を示すことがどうしても必要となる。特に五十音順に配列する場合には、年代を示さなくては意味をなさない。けれども、使用年代を確実に知ることはなかなか困難であ

る。特にその語が使われはじめた年代、使われなくなった年代などを知ることが不可能な場合が多い。そこで、本辞典では何かの手がかりで、使われたことが推定できる年代を示すこととした。したがって示された年代以前から使われていた語も多かるうし、示された年代以後に亡びたか、それとも現在まで使われているかは分らない場合も多い。だいたい目安を示したに過ぎない。年代の区分については「略語表」の部を見られたい。

諸事項配列順序

以上述べた、一項目中の諸事項の種類と共にならべてみると、次のようになる。

見出し語「文字表記」品詞 ↓ 参照見出し語 語釈。

①②③。(参考事項)「↑語原」「用例」「出典」↓参照

語。(地方―類別)年代

符号

符号の使い方には、次のようなきまりがある。これらをよく知っていないと、語釈などを十分に読み取れないことも起るだろうから、御注意ねがいたい。

↓……見出し語では語の切れ目を、語釈その他では「や」「および」の意味を示す。

↑……「以下を参照せよ」「以上から転じて以下に移った」の意味に使う。

↑……「以下の事から生じた」の意味に使う。

↑……「すなわち」「は(次の意味)である」の意味に

使う。

?……「以上の文字や解釈には疑問がある」の意味に使う。

・()……「または」の意味に使う。(たとえば「盗むこと(者)」は「盗むことまたは者」の意味である。)

()……語釈の前では意義に関係のある説明を示すのに使う。

語釈の後ではその意義に使われる場合の用法・態度などを示すのに使う。

文中では補助的な説明をするのに使う。

項目一括 特に関係の深い項目は、別々に項目をたてないで、一括して示した。しかし、別項目

として求める読者が多かるうと予想される場合その他では、一括しなかったこともある。

索引

近代の辞書の特色の一つは、読者・利用者の、いろいろ違った立場からの要求に、できるだけ満足を与え得るように、編集することである。索引もそういう考慮から作られるのであるが、辞書の場合、辞書の本文そのものが索引の役目をはたしているから、必要のない場合が多い。しかし、この辞書のように、いろいろの違った特殊社会集団の隠語を集めて、それを五十音順に配列してある場合には、特定の社会集団

この辞典の使い方

の用語だけを調べたいと思っても、非常な困難を感じるだろう。そのため、特定の社会集団の用語だけを求め得るように、「種類別隠語索引」を作った。ただ、あまりに用語の数が多いもの（盗賊用語・俗語・香具師用語・相場用語・賭博用語・洒落言葉・すり用語など）は、紙数の関係もあって、載せることができなかった。またその反対に、用語の数が少ないものも、割愛せざるを得なかった。だいたい二十語以上を目安とした。しかし語数が多くとも必要と思われるもの（花柳語・演劇用語・せんぼ・女房言葉）は載せておいた。

隠語辞典には、もう一つ特殊事情があって、犯罪隠語にも、性的隠語にも、同義語がきわめて多い。その点は方言の場合とよく似ている。どんな語に同義語が多いかを見ただけで、その語の隠語的重要性が分って、それだけでも重要な参考資料となる筈である。「分類主要同義語索引」はそんな目的で作った。しかし、これにもやはり紙数の制限があって、二十語以上のものを全部載せることができなかった。そこで、語数には関係なく、主要と思われる語だけに限った。なにぶんにも、校正の最も忙しい時に、並行しての仕事だったので、細心には努めたが、多少の脱漏があることをおそれている。

割愛した語のうち語数の多いのから順に示して参考に供しておく。

窃盗（二二六）賭博（一六八）すり（一六一）詐欺

（一一九）密告（六五）共犯（六四）芸者（六二）
捜査（四九）月経（四六）発覚（三四）（以下三十語以下）夕。風。 じばん。味噌。茄子。豆。行方不明。前科者。警部。看守長。留置場。紙幣。銅貨。住居。宿屋。鋸。汽車。など。